

応和二年五月の贈答歌：『蜻蛉日記』66・67・ 68・70番歌の解釈

後藤，康文
九州大学大学院（博士課程）

<https://doi.org/10.15017/11946>

出版情報：語文研究. 65, pp.38-47, 1988-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

応和二年五月の贈答歌

『蜻蛉日記』66・67・68・70番歌の解釈——

後藤康文

『蜻蛉日記』上卷には、応和二年五月から六月にかけて、醍醐天皇皇子章明親王と藤原兼家とがとりかわした一連の詠作が収められている。本稿の目的は、その前半部分を構成する66・67・68・70番(注1)の歌の解釈を再検討することにある。底本には書陵部蔵桂宮本(注2)を用いるが、直接考察の対象としない部分はあらかじめ整理した形で引用する。また、論中における諸注の略称は、上村悦子著『蜻蛉日記解釈大成』(昭58、明治書院刊)のそれにしたがった。(注3)

本文

少納言の年経て、四つの品になりぬれば、殿上もおりて、司召にいとねぢけたるものの大輔などいはれぬれば、世の中をいとうとましげにて、ここかしこ通ふよりほかのありきなどもなければ、いとどかにて、二三日などあり。さて、かの心もゆかぬ司のかみの宮より、かくのたまへり。

65 乱れ糸のつかさひとつになりてしもくることなど絶えにたるらむ

御かへり、

66 たゆといへはいとそかなしききみによりおなしつかさにくるか

ひもなく

また、たちかへり、

67 なつひきのいとことわりやふためみめよりありくまにほとふ

るかも

御かへり、

68 な、はかりあるもこそあれなつひきのいとまやはなきひとめふ

ために

また、宮より、

69 君とわれなほしら糸のいかにして憂きふしなくて絶えむとぞ思

ふ

ふためみめは、げに少なくしてけり。忌あれば、とめつ」とのたま

へる、御かへり、

70 よをふとてちきりをきてし中よりはいと、ゆゝしきこともみゆ

らむ

ときこえらる。

応和二年(962)正月七日、藤原兼家は従四位下に叙されるとともに、それまで勤めた少納言の職を離れ殿上を下りた。そして、同年五月十六日には、兵部省の次官である兵部大輔に任じられるが(以上「公卿補任」、この官が「正五位下相当の官だから従四位下の兼家としては不満であ」(『全評解』)ったためか、「出世コースでないポスト」(『対訳』)であったためか、兼家は腐りきって引き籠りがちになる。そこへ、「心もゆかぬ司のかみの宮」章明親王から、「今まで勤務が別々だった我々がせっかく同じ役所勤めになったというのに、どうして出仕がとだえてしまっているのでしょうか。」という意の歌(65番歌)が届けられた。

66番歌はこれに対する兼家の返歌で、その歌意は概ね次のように理解されてきた。

絶えるなどとおっしゃいますと、ほんとうに悲しゅうございませぬ。宮さまを頼りに同じ役所に来たかきもございませぬので(『全集』)

さしあたり無難な解釈であり、これで十分といえは十分なのかもされない。しかし、こう解しただけではこの一首、内容的に平板でなにやらものたらぬ歌だという印象を免れないように思われる。実は、もう少し踏みこんだ解釈の余地があるのではなからうか。

そこで、あらためてこの歌が詠まれた時の状況を思い起こしてみたい。すなわち、この頃の兼家の心は、自分が兵部大輔という割に合わない役職にまわされ、冷遇されたとの思いでいっぱいだったは

ずで、そうだとすれば、直属の上司でありまたかねて親しい間柄でもあった章明親王から出仕を促す歌が贈られたのを機に、兼家の腹にたまった不満が全く吐露されなかつたはずはないと考えられる。

66番歌を、こうした視点から再検討してみるとどうであろうか。すると、筆者には、初めに呈示した日記本文中の「いとねぢけたるもの大輔などいはいれぬれば」という箇所と、この歌の初句とが重なって見えてくるのである。これはかなり思い切った提案だが、要するに、兼家の歌の「たゆ」には「大輔」が掛けられている可能性があるということなのである。

「大輔」の音は本来「タイフ」であるが、後には「タユウ」と読まれるようになる。そして、その音韻変化はおそらく「タイフ」↓「タイウ」↓「タユウ」という過程を辿ったものと考えられるが、いつ頃「大輔」が「タユウ」と発音される段階にはいったかは明確にしたい。

いわゆる「ハ行転呼」現象は、「十世紀末までは個別的音韻変化であったが、十一世紀初以後、普遍的音韻変化となった」とされ、ウ・フの混乱については、貞元元年(961)頃加点の醍醐寺本「法華経釈文」に見える「種ウフル」・「裁也ウフル」の二例がその早い時期のものとして報告されている。これらを考慮に入れると、応和二年(962)当時すでに、個別的にせよ「大輔」が「タイウ」と発音された場合もあったと想定するところまでは、あながち無暴とはいえない。

問題は「イウ」↓「ユウ」のウ段拗長音化現象の実態であるが、これについては、「おおむね中世末期頃までに完了していたと考えられる」もの、「イ・ウ」とわって発音されていたものが、全般

的に何時頃から今日のように拗長音化したかは、裏付ける資料が少なく、その推定はなかなか困難である^(注9)とされる。もっとも、音韻史の通念では、やはり中世にはいってから起こった現象と見るのが妥当なところらしく、今日訓点資料の上でその最も早い例として報告されているのも、承久三年(1221) 加點清原本『御注孝経』において「言フ」を「ユウ」と記した例のようである^(注10)。

しかし、表記は発音の実相を必ずしも十全に伝えるものではないし、いわゆる「かなづかい」意識の問題も絡んでくる。だから、表記の上である発音を忠実に映した徴証が現われるより以前に、実際にその発音が行なわれていた可能性を否定し去ることはできない。

さらに、「イとウとのむきだしな結合^(注11)」が「日本語の音韻体系その特質にもとる不安定なものである」とするならば、「タイフ」が「タイウ」に変化してから実際の発音上「タユウ」となるまでには、あるいは、それほど時間を必要としなかったかもしれない。

今かりに、応和の頃早くも「大輔」を「タユウ」と発音する場合もあったと仮定してみると、ことがもともと朗誦性を有する和歌に関わっている上に、当時はまだ「母音の長短意識が、かなり曖昧だった^(注12)」ともいわれるから、「たゆ」と「大輔(タユウ)」とは立派に掛け詞として通用したであろう。そしてまた、「タイウ」の段階であつたとしても、掛け詞が元来音韻的にはかなり柔軟性をもつ言語遊戯であること、及び66番歌が詠作された情況等個別的な事情をも考慮すれば、少なくとも当事者間では、この両語、掛け詞として十分理解されえたものと思われる。

あとは国語学的見地からの批判を伏すばかりではないが、とりあえず以上の考えを66番歌に当てはめて解釈してみるとどうなるであろう

か。表の意味は諸注のごとくでよいが、それに加えて、次のような裏の意味が浮かびあがりはしないだろうか。

このたび私に与えられた役職が、左遷に等しい兵部大輔だというので、たいそう悲しいのでございます。あなた様のおかげで同じ役所に配属されたのは喜ばしいことですが、これではそのかいても思われま

す。兼家は、宮の歌に見えた「たえ(たゆ)」という語を巧みに捉え、見事に掛け詞として利用した。そして、自らの不遇感を相手に訴えて同情を求め、出仕を怠りがちな現状を申し開いたのである。つづく67番歌の内容を検討し直してみると、このことはいっそうはっきりするようになる。その67番歌は、先の兼家の歌に宮が応じた歌であり、諸注の解釈は、

出仕がないのは、ごもつとも。二人三人と隠し妻のもとを寄り歩いてい

るうちに、時が経ってしまうのだろう。(『集成』) という線ではば一致している。ここで再考を要するのは、この歌の第二句「いとことわりや」がいったい何を受けているのかということである。諸注は、兼家が漁色にいとまなくて出仕できないのだという宮の付度、つまり同歌第三句以下の内容を受けると見なしているようであるが、これでは一首の構造に忠実な読解とはいえず、したがえない。ちなみに、宮の歌の構造を簡潔に示せば、

エハ 初二句。ソレデ 第三句以下。

となるはずであり、右のエに該当するものは、兼家の66番歌の内容以外にないことが知られよう^(注13)。

ところが、ここでその66番歌を従来どおりに解していたのでは、67番歌の歌意も、「あなたが、私に『絶えた』といわれて悲しいと

おっしゃるのも道理。それで、二人三人と女の間を寄り歩いてるうちに、時間が経ってしまったわけですなあ。」という、なんともちぐはぐなものとなりはしないだろうか。この点からも、67番歌の「いとことわりや」はやはり、66番歌の「たゆ」に暗示された「(兵部)大輔」の意を読みとった上で発せられた言辭と考える必要がある。これを兼家の歌に表われた彼の挫折感、不遇感を酌んで肯定納得した宮の言葉と解してこそ、一首の真意がはじめて理解されるに至るのである。畢竟、宮の67番歌は、次のように解釈すべきであらうと思われる。

兵部大輔というパツとしない役職に任じられ、あなたが傷ついでいらっしゃるといふのも、まったくごもったもな話。それで、憂さ晴らしに二人三人と女の間をめぐり歩いてしげこんでいるうちに、出仕が滞ってしまったというわけですなあ。

章明親王は、自作の初二句で兼家の心中を察し同情——おそらくは衷心よりの——を示したあとで、第三句以下においては、一転彼の怠勤ぶりを皮肉っぽくちやかしているのである。

以上、66番・67番の両歌は、このように相補って読み解くことによつて、それぞれの真意が明らかにされるものと感じられる。

(二) 68番歌の解釈

つづく68番歌の解釈のポイントは、ひとえにその第二句にあるといえる。最初に、従来の主要な見解を整理して掲げ、それぞれにつき簡単な批判を試みる。

(1) 「ありもこそあれ」と改訂する説……『大系』・『全講』・『注

解』・『新注釈』・『全評解』等

(2) 「ありもこそすれ」と改訂する説……『全注釈』・『全集』・『全

訳注』・『対訳』・『集成』等

どの注釈書も、本文を改めざるをえないと判断している点で一致するが、まずは(1)の案についてみることにしよう。この考え方は、動詞「あり」を二度重ねることによつて、兼家自身が七人(≡多数)もの妻妾を持っていることを自ら誇示強調した表現と解したのである。ところが、強調形としての「ありもこそあれ」はいかにも不自然な形であり、おそらくは他に例を見ない表現であろうと思われる。あえてこの方向で考えようとするならば、むしろ、

神無月時雨とともに神奈備の森の木の葉は降りここそ降れ

〔後撰集〕452・よみ人しらず

いのちあらばいかさまにせん世をしらぬ虫だに秋はななきにこそなけ

〔千載集〕1095・和泉式部

などの歌に見られる強調形に倣つて、「ありにこそあれ」と改訂すべきであったといえる。もともと、理屈の上では考えうる「ありにこそあれ」の句形も、現在のところ実例として管見にはいってはいない。

次に(2)の案について。こちらの場合、「ありもこそすれ」という言葉の形自体には何ら問題はないが、今度は解釈の面で、どうにも納得できない結果を将来することになるのである。今は「もこそ」の意味自体について詳述している余裕もなければその用意もないが、「ありもこそすれ」という表現に限っていえば、必ず未来に属する事柄を多くは危惧の念を包含着して予測するいい方であることに間違いはなく、その場合68番歌の初二句は、「七人(≡多数)の妻妾が将

来できる」と大變だ、また危懼を含まない例と解しても、「七人（『多数』の妻妾が将来できるかもしれない」との意になるはずであるところが、(2)の案を採った諸注は、「はばかりさま、七人ほど、いや、たくさん、おりますので：。」（『全注釈』）、「夏引の糸の七ばかり、それほど多くの妻がおりますのに」（『全集』）、「イヤイヤ実は七人ばかりも妻がございまして。」（『全注釈』）、「妻は七人ばかりはありますのに。」（『対訳』）、「憚りながら、夏引の糸は七ばかり——それほど沢山の妻がおります。」（『集成』）と、揃って現在の兼家の状態——それが事実か否かはともかく——を述べたものと解しており、これは文法上許されない解釈ではあるまいか。また、これらとは別に、「もこそ」の語義を追究した松尾駿氏は、この歌を次のように読解している。

(アナタノオ詞ニトツテガイガワルイコトデスガ) 将来ハ私
ニハ七人グライ妻ガアル事モキツアリマスヨ。タカガ一人ヤ
二人ノ妻デ暇ガ無イ事ガアルモノデスカ

いわゆる「危懼の「もこそ」」のところがとらえた解釈だが、この解も、筆者には全く釈然としない思いを募らせるばかりであった。

これまでの解釈がすべて認めがたいものであるとするならば、この歌はどのように解き直すべきなのであろうか。私見によれば、諸注の第一の躰きは、第二句の本文を強いて改めなければならぬと考えた点にあった。虚心に見直すに、この歌の第二句は「あるもこそあれ」のままでよいのである。

第二句に「もこそあれ」という語形を含み、下の句が反語表現をとる——つまりその点で『蜻蛉日記』68番歌と同じ構造をもつ——同時代の歌に次のようなものがあり、68番歌を正しく解釈する上で

大きな手掛りを与えてくれる。

(イ) かく咲ける花もこそあれ我がためにおなじ春とやいふべかりけ
る
〔大和物語〕 37段

(ロ) ひとりぬる人もこそあれひとつがひなくなる鴛鴦の声やかなし
き
〔長能集〕 140

また、やや時代は下るが、

(ハ) 思ひしる人もこそあれあぢきなくつれなき恋に身をやかへてむ
〔後拾遺集〕 655・小弁

という歌や、当の『蜻蛉日記』に、下の句の本文に問題を残すもの、

(ニ) 千年経る松もこそあれほどもなく越えてはかへるほどや遠かる
〔下巻・天延二年十一月〕

という作があるのも参考になる。これらの歌に用いられた「もこそ」は、すべて現在の共時的・確定的事実を強調する機能をはたしており、詳しく分析すれば、「も」(並列) + 「こそ」(強意) と説明するのが適當な語法といえる。さらに、「こそあれ」は下文に逆接の意を含んでかかって行く性質を帯びるため、これらの「もこそあれ」は、やや諷刺するならば「ソウデナイ××モアル」一方で、世間ニハ現ニ○○×××ダツテアルトイウノニ」くらいに、簡単にいえば「ダツテアルトイウノニ」の意となる。今各例に即してその解釈を示せば、およそ左のようにならう。

(イ) (私のようにうだつのあがらない人間(「咲かない花」もある一方で) 世間には現にこうして栄達をとげる人間(「咲く花」だっているというのに、私にとってこの春を同じ春といえようか、いやとでもいえない。

(四)「其寝をしている人間もある一方で」世間には現に独り寝をしている人間だっているというのに、ひとつがいで鳴いている鴛鴦の鳴き声が哀切に聴こえるなんてことがあるうか、ありはしない。

(ハ)「私の切ない気持ちを少しも理解してくれない人もある一方で」世間には現にわかってくれる人だっているというのに、かにもなくつらいこの恋のために、(簡単に)出家してしまってもよいものだろうか、いやいけない。(注行)

(ニ)「そうでない松もある一方で」世間には現に千年もの時を経過する松だつてありますのに、私がほかの人に心を移してまたあなたのもとに戻ってくるほんの短い間が、そんな待ち遠しいなんてことがありましようか、御辛抱が足りませんわ。(注八)
以上のことを参考にするに、『蜻蛉日記』68番歌の初二句も、「あ」の下に体言が省略された形、つまり「な、はかりある(人)もこそあれ」の意と考えて解釈すべきではないかと思われてくる。そうすると、この歌は先に掲げた四首と全く同工となり、試みにその歌意を訳出するならば、

「私のようにそうでない男もいる一方で」世間には現に(だれ、かさんのように)七人(≡多数)もの妻妾を持っていらっしゃる方だつておありだというのに、たかだか一人二人の女のために時間がないなんてことがありましようか、そんなことはございません。

となろう。ここで諸注の第二の躰きが明白となる。この歌の初二句で、兼家は自らについてその身に妻妾の多きを誇つたのではさらさらなかつたのである。否、むしろ、下の句から明らかのように、彼

は宮の推量した「ふためみめ」どころかせいぜい「ひとめ」か「ふため」しか自分にはいないのだと、へりくだつてみせてさえている。そして、わが身に引きくらべる形で、世間にはまこと羨ましい御身分のお方もいらっしゃるものと、具体的には章明親王の艶福家ぶりを揶揄する文句をはじめに配置したというのが、一首の真相だったのでなかるうか。

(三) 70番歌の解釈

敷をつついて蛇を出す格好となつた宮から、さらに「あなたと私との関係は、やはりなんのごたごたもない今のうちに、なんとか絶えてほしいものだと思うよ(69番歌)。おっしゃるとおり、我が身を省みれば、二三人だなんてまったくケチな推し当てをしたものだ。これ以上はさし障りがあるので、やめとくよ。」というたよりが届く。章明親王は、この先兼家との交際を続けようものなら何をいわれるかわからないと戦々兢兢々の態、無論戯れである。兼家は、早速70番歌をもってこれをとりなす。

さて、現行のほとんどの注釈書は、この歌の初句を「よをふとも」に改めた上で、

長年つれそつたとしても、契りをおわした男女の仲からは、別れ別れになるといふようなもつといまわしいこともあるでしょう。しかし、私も男どうしの間では、そんなことがおこるはずはけつしてございません (『全集』)

といった意味に解しているが、これはあまりに振れに苦しい解釈というほかはない。以下においては、もう少し素直な解釈を求めるべ

く、この歌の各部分に即して再検討を加えてみたい。

第一に明確におこななければならないのは、結句に見える助動詞「らむ」の意味である。諸注では、その現代語訳から窺うかぎり、これを推量の助動詞「む」と同義に解しているようであるが、この判断には大変疑問が残る。たしかに、助動詞「らむ」は後に語形が「らう」に変化し、中世以降単純な推量を表わすようになって行くし、平安朝の作品においても、『枕草子』（三巻本）の次の例などは「む」と同義に解されている。

御読経の僧の、(中略)とぶらひ人あまた来て、経ききなどするも隠れなきに、目を配りて読みのたるこそ、「罪や得らむ」とおぼゆれ。
〔新潮日本古典集成・180段〕

けれども、右の「らむ」は必ず未来推量の確例と見なさねばならぬものとも思えず、かりにそれを認めるとしても、平安朝の一般的な「らむ」の用法から見れば、極めて特殊な例外でしかないのである。

したがって、解釈の順当な筋からいえば、70番歌の「らむ」にも、まずはこの助動詞の本義である現在推量もしくは原因推量の語義を当てはめてみるべきであろう。そうすると、『蜻蛉日記』にはすでに、道綱母の次のような詠があったことが思い出される。

19 なげきつつかへす衣の露けきにとど空さへしぐれそふらむ。
(上巻・天曆八年十月)

この歌の「らむ」は、

ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

(古今集) 84・友則)

などと同様、下の句の頭に「など」等疑問の副詞を補って、「ドウシ

テシテイルノダロウカ」という原因推量の意に解され、^(注19)「蜻蛉日記」諸注も、ここにおいては概ねこの義に解しているのである。70

番歌の下の句が19番歌のそれと「いとどらむ」の形で一致していることを思えば、「らむ」の語義についても同じ判断を下すべきであり、その意味は、「どうしていっそう縁起でもないお言葉までもが見えているのでしょうか」となるのではないか。なお、ほとんどの注釈書は、「ゆゑしきこと」の「こと」を事柄の「事」ととっているが、これは誤りで、言葉の「言」とすべきである。「縁起でもないお言葉」とは、宮の69番歌中に見える「絶えむとぞ思ふ」を指す。

下の句の解釈については、一応以上のように考えておくが、さらに「らむ」との呼応の点では、「ことも」は「こと」である方が望ましいかもしれない。

言の葉のうつるふだにもあるものをいとどしぐれの降りまさるらむ。
〔新古今集〕1241・伊勢)

春雨の降るに思ひは消えなくていとど思ひのめをもやすらむ。

(古今六帖) 468)

ふりはへて花見にくればくらぶ山いとど霞の立ちかくすらむ。

(興風集) 69)

などの類型が存在する上に、「裳」の草体と「農」の草体とはしばしば誤られるため、その可能性は十分に認められるだろう。

次いで、第三句に目を転じてみたい。この「中よりは」という表現の意味を的確に捉えるためには、左の歌の存在が参考になる。

人づてにいふ言の葉の中よりぞおもひつくばの山は見えける

(後撰集) 686・よみ人しらず)

うちいだし綾のむしろの中よりぞ錦に織れる文も見えける

安法の作が、先行する『後撰集』の歌を念頭に置いたものであることは明らかだが、筆者は、『蜻蛉日記』70番歌の場合も、用語の共通性などから見て、そうである可能性が非常に高いと判断する。そうすると、兼家の歌の「中よりは」は、「宮様のお手紙の中から」の意と理解すべきであることがわかり、また、第二句からのつながりを考慮すると、「中」という語にはさらに、「宮様と私との変わらぬ交誼を誓い合った間柄」の意も当然掛かってくることになる。だから、この歌の第二句第三句は、結局「あれほど変わらぬ交誼を誓い合った間柄であるあなた様のお手紙の中から」と解しておくのが妥当なところであろう。

残る初句については、どのように考えるべきであろうか。はじめに、桂宮本文を改めるべきか否かという問題がある。私見によれば、「よをふとて」の「とて」を「く(だから)といって」の意に解することに、底本のままで十分解釈可能にも思えるが、他の『蜻蛉日記』主要伝本(第一類B系及び第二類本)が「て」を「も(心)とすること」、「て」と「も(ん)」とでは誤写の可能性が極めて高いこと等からして、ここはやはり、諸注のごとく「よをふとも」の形に改めておいた方が無難なようである。

ただし、その上で「とも」を、従来どおり純粹な逆接の仮定条件を表わす接続助詞と解するのであれば、それは誤りである。この場合の「とも」は、すでに確定している事実を修辭的に仮定するいい方、いわゆる「修辭的仮定」の用法と見なければならぬ。ちなみに、『蜻蛉日記』中から、「修辭的仮定」の意で用いられた「とも」の例をいくつか拾い出してみよう。

さらば、いと暑きほどなりとも、げにさいひてのみやはく思ひ立ちて、石山に十日ばかりと思ひ立つ。(中巻・天禄元年七月)
我が家にとまれる人のもとより、「おはしまさずとも、菖蒲ふかでは、ゆゆしからむを、いかがせむする」といひたり。

(中巻・天禄二年五月)
人やりならぬわざなれば、とひとぶらはぬ人ありとも、ゆめに
つらくなど思ふべきならねば、いと心やすくてあるを

(中巻・天禄二年六月)
「年月の勤事なりとも、けふの参りには許されなむとぞおぼゆる。(中略)など、いと言よし。(中巻・天禄二年十一月)

右にあげた「とも」の用例は、すべて「現ニソウナノダガ、タトエソウデアアツテモ」の意味であり、70番歌の「とも」もこれらと同様であつてみれば、その初句は、「宮様とは現に長いおつき合いです、たとえそうではありましても」と解釈すべきなのである。

それではここで、一首全体を纏めてみたい。まず本文は、世を經とも契りおきてし中よりはいとどゆゆしき言の見ゆらむと整理する。そして、現代語訳は次のとおり。

我々の交際がはじまってから既に長い年月が経っていますが、たとえそうではありましても、あれほど変わらぬ交誼を誓い合った間柄であるあなた様のお手紙の中から、どうして(絶交しようなどと)いっそう縁起でもないお言葉が見えているのでしょうか。

注

1 本論中で使用する『蜻蛉日記』及び諸歌集の歌番号は、すべて『新編国歌

大観」のそれによる。

2 笠間影印叢刊68、70『桂宮本蜻蛉日記』(甲)(乙)(昭57、笠間書院)

3 そのほか、上村悦子訳注『蜻蛉日記全訳注』(甲)(乙)(講談社学術文庫、昭53)は『全訳注』と略称する。

4 このふたりの親交が、兼家の兵部大輔任官を機にはじまったと見る向きもあるが、そうでないことは、宮の65番歌に用いられた副助詞「しも」のニュアンスひとつからも、十分に察知されるはずである。

5 神原本『下学集』、文明本『節用集』など。また、和文文献の上で今日までたまたま管見にはいったものについて記すと、たとえば、擬古物語『浅茅が露』(天理図書館本、鎌倉末〜南北朝初期写)では、「兵衛 大夫」のかな書き例のすべてが「たゆふ」である。

6 築島裕著『国語学叢書3平安時代の国語』(昭62、東京堂出版)第三章「音韻(一)国語音」134頁

7 中田祝夫「平安時代の国語」↓『日本語の歴史』(昭32、至文堂)116頁

8 『講座国語史2音韻史・文字史』(昭47、大修館書店)第二章「古代の音韻」(奥村三雄氏執筆)85頁

9 福島邦道「見ゅう」と「見よう」の交替」↓『高橋博士国語学論集』(昭44、表現社)52頁

10 馬淵和夫著『国語音韻論』(昭46、笠間書院)山頁、注8書第一章「総説」(中田祝夫氏執筆)33頁など

11 『国語学大辞典』(昭55、東京堂出版)付載「国語年表」

12 亀井孝「国語の慣用の徴証につきその発掘と評価」(国語学第76集、昭44・3)

13 注8論文83頁

14 同音でない掛け詞の例は、『蜻蛉日記』のうちにも見出させる。60なつくべき人も放てば陸奥のみまやかきりにならむとすらむこの歌の「むまや」には、いうまでもなく「今や」の意が掛けてある。なお、掛け詞の音韻的研究としては、遠藤邦基氏に一連の論稿がある(『仮名遣を異にする掛け詞―『四つがな』の世界―』国語国文、昭47・6ほか)。

15 参考までに、次に三組の歌を掲げる。

(詞書略)
そのかみのながよしとただしりぬれば人のかずともおもほえぬかな
かへし

ことわりやしか憂き身なりしかあれどもよしまさるらん人はたれかは
かへし (『長能集』103・104)

亡き人にかごとはかけてわづらふもおのが心の鬼にやはあらぬ
かへし (詞書略)

今よりは思ふことをもいはで経むしふるはつらきものにぞありける
かへし (詞書略)

ことわりやさても心にしられにき思ふ人やは人をしひける
かへし (『公任集』42・43)

返歌三首の初句「ことわりや」は、すべて前の歌の内容を受けていることが知られる。
16 「狭衣物語などの『もこそ』」(国語展望48号、昭53・2) ↓ 『源氏物語を語意の紛れ易い中古語放』(昭59、笠間書院)90頁

17 この歌の初句「思ひしる」を、
成信、重家ら出家し侍りけるころ、左大弁行成がもとにいひつかはしける
思ひしる人もありける世の中をいつをいつとてすぐすなるらん (『拾遺集』1335・公任)

などの場合と同じく「世の無常を痛感する」の意にとれば、その歌意は「世間には世の無常を痛感して出家する人だっているというのに、私もこのかにもなくつらい恋を機縁に、いっそ遁世してしまおうか。」と解せるかもしれない。なお、同歌には藤本一忠氏(講談社学術文庫『後拾遺和歌集全訳注』

(三) 昭58) や松尾駿氏 (「危惧の意でも並列の意でもないという『もこそ』
について」国語展望49号、昭53・5 ↓注16書) の解釈があるが、ともにした
がえない。

18 この歌はその第三句以下にまだ定解を見ない。ここに示したのも現
時点での試解にすぎない。

19 この種の「らむ」の用法については、詠嘆表現とみるなど異説もあり、な
お考究すべきであるが、今は立ち入らない。山口堯二「喚体性の文における
疑念の含意——『しづ心なく花のちるらん』の基底——」(国語国文、昭

63・2) 参照

20 佐伯梅友「淀むとも」考」↓『万葉語研究』(昭13、文学社)